

【資料：明星大学の歴史】

明星大学開設初期における『研究紀要』（2） — 人文学部 —

Ⅱ. 『明星大学研究紀要—人文学部—』

1. 第1号 1965（昭和40）年3月刊

目次

研究紀要第一号発刊に際して……………	児玉 九十
大学理工学部における英語教育……………	百瀬 甫 ……1
詩人と政治的立場……………	本戸 啓嗣 ……11
すみれ考……………	倉田 豊茂 ……19
The Characteristics of Blake's Symbolism and Its Development in His Poems and Paintings ……	Seikichi Ochiai ……27
トーマス・マンの沈黙……………	鈴木 博 ……51
カフカとプラーク……………	板倉 敏之 ……61
三段跳技術指導の分析的研究……………	三沢 光界 ^(ママ) ……71
社会現象の歴史性と法則性……………	銅直 勇 ……83
熊沢蕃山の学校論に関する考察……………	松野 憲二 ……104
「月やあらぬ考」追い書き……………	佐伯仁三郎 ……108
英文要旨……………	109

執筆者紹介

児玉 九十	学長
百瀬 甫	教授（イギリス文学）
本戸 啓嗣	助教授（イギリス文学）
倉田 豊茂	教授（イギリス文学）
落合 盛吉	教授（イギリス文学）
鈴木 博	専任講師（ドイツ文学）
板倉 敏之	講師（ドイツ文学）
三沢 光男	専任講師（保健体育学）
銅直 勇	教授（社会学）
松野 憲二	専任講師（教育学）
佐伯仁三郎	教授（国文学）

研究紀要第一号発刊に際して

学長 児玉 九十

『明星大学研究紀要—理工学部—』第1号「研究紀要第一号発刊に際して」と全文同

= 掲載 略 =

≪編集後記≫

『明星大学研究紀要—理工学部—』第1号「編集後記」と全文同

= 掲載 略 =

(M・K)

2. 第2号 1966 (昭和41) 年3月刊

目次

研究紀要二号発刊に際して……………	児玉 九十
The Characteristics of Blake's Symbolism and Its Development in His Poem and Painting……………	Seikichi Ochiai ……1
西東詩集のHumorについて……………	田尾 一一 ……33
リヒアルト ワグナーとドイツ的なもの……………	鈴木 博 ……41
Henry W. Fowler の Profile ……	百瀬 甫 ……49
Romeo and Juliet の the characters について……………	宮崎 昭威 ……65
社会進歩の社会学的接近について……………	三好豊太郎 ……75
心理的現在……………	安倍 三郎 ……87
学生運動のマルクス主義経済学批判	
特に労働の神秘性について……………	野沢 竹人 ……97
歌の丘の雑草……………	佐伯仁三郎 ……110
英文要旨……………	111

執筆者紹介

児玉 九十	学長
落合 盛吉	教授 (イギリス文学)
田尾 一一	教授 (ドイツ文学)
鈴木 博	専任講師 (ドイツ文学)
百瀬 甫	教授 (イギリス文学)
宮崎 昭威	助教授 (米英文学)
三好豊太郎	教授 (社会学)
安倍 三郎	教授 (心理学)
野沢 竹人	教授 (経済統計学)
佐伯仁三郎	教授 (国文学)

研究紀要第二号発刊に際して

児玉 九十

『明星大学研究紀要—理工学部—』第2号「研究紀要第二号発刊に際して」と全文同
=掲載 略=

《編集後記》

『明星大学研究紀要—理工学部—』第2号「編集後記」と全文同
=掲載 略=

(M・K)

3. 第3号 1967(昭和42)年3月刊

目次

研究紀要第三号発刊に際して……………	児玉 九十
英語の綴字“OA”及“OAR”の発音に関する史的考察……………	酒井 陽之 ……1
三段跳学習指導の実験的研究……………	三沢 光男 ……9
社会事業の数量化的アプローチについて ^(ママ) ……………	福永 安祥 ……21
過去・現在・未来の心理学的性格とその評価の根本尺度……………	安倍 三郎 ……33
「ピノッキオ」に於ける一つの教育論……………	前之園幸一郎 ……41
教育的人間—夏目漱石……………	森下 恭光 ……55
熊沢蕃山の学校論に関する考察(二)……………	松野 憲二 ……76
後拾遺集一一〇番の詞書より発してその作者に及ぶ……………	杉崎 重遠 ……102
英文要旨……………	103

執筆者紹介

- 児玉 九十 学長
- 酒井 陽之 専任講師(英文学)
- 三沢 光男 専任講師(保健体育学)
- 福永 安祥 助教授(社会学)
- 安倍 三郎 教授(心理学)
- 前之園幸一郎 専任講師(教育学)
- 森下 恭光 専任講師(教育学)
- 松野 憲二 専任講師(教育学)
- 杉崎 重遠 教授(国文学)

研究紀要第三号発刊に際して

学長 児玉 九十

『明星大学研究紀要—理工学部—』第 3 号「研究紀要第三号発刊に際して」と全文同

= 掲載 略 =

≪編集後記≫

『明星大学研究紀要—理工学部—』第 3 号「編集後記」と全文同

= 掲載 略 =

(M・K)

4. 第 4 号 1968 (昭和 43) 年 12 月刊

目次

研究紀要第四号発刊に際して……………	児玉 九十
Early Transition Old English における Word Order	
—主として Old English Homilies と The Peterborough Chronicle について……………	牧野 輝良 …… 1
Jacob Grimm—その自伝を中心に……………	春田伊久蔵 …… 15
アンドレ・ジイドにおける自我について	
—鏡のイマージュをめぐる一試論……………	増田 治子 …… 27
体育が人生に及ぼす価値について……………	伊能 四郎 …… 39
リンカーン大統領の指導力……………	岡田 皓一 …… 45
パレートの社会システム論に関するノート……………	中田 重厚 …… 57
自己認知に関する一研究……………	加藤 義明 …… 69
「フレール教育学」理解のための基本的視点の考察 (1) ……	甲斐 規雄 …… 79
能力説と累進課税論……………	大浦 一郎 …… 91
後拾遺集—〇六番の詞書について……………	杉崎 重遠 …… 136
英文要旨……………	137

執筆者紹介

児玉 九十	学長
牧野 輝良	専任講師 (イギリス文学)
春田伊久蔵	教授 (ドイツ語)
増田 治子	専任講師 (フランス文学)
伊能 四郎	教授 (保健体育)
岡田 皓一	専任講師 (政治学)
中田 重厚	専任講師 (社会学)
加藤 義明	助教授 (心理学)
甲斐 規雄	助手 (教育学)
大浦 一郎	専任講師 (経済学)
杉崎 重遠	教授 (国文学)

研究紀要第四号発刊に際して

学長 児玉 九十

『明星大学研究紀要—理工学部—』第4号「研究紀要第四号発刊に際して」と全文同
=掲載 略=

《編集後記》

『明星大学研究紀要—理工学部—』第4号「編集後記」と全文同
=掲載 略=

(M・K)

5. 第5号 1970(昭和45)年4月刊

目次

研究紀要第五号発刊に際して……………	児玉 九十
A Study of the New Type of Inverted Word-Order in American ……	牧野 輝良 ……1
ホフマン研究序説……………	石川 進 ……7
陸上競技技術の文献史的一考察……………	三沢 光男 ……21
マックス・ウェーバーにおける個性的歴史認識の可能根拠と限界……………	山下淳志郎 ……39
Thurstone 版 Gottschaldt Test の分析……………	加藤 義明 ……55
「人間の教師」と国木田独歩……………	森下 恭光 ……69
ベンジャミン・フランクリンの教育思想に関する一考察 —フランクリン自伝を中心として—……………	福島 茂明 ……79
「フレーベル教育学」理解のための基本的視点の考察(二)……………	甲斐 規雄 ……89
管仲の経済思想……………	岡田 巧 ……99
英文要旨……………	115

執筆者紹介

児玉 九十	学長
牧野 輝良	専任講師(イギリス文学)
石川 進	教授(ドイツ文学)
三沢 光男	専任講師(保健体育)
山下淳志郎	助教授(社会学)
加藤 義明	助教授(心理学)
森下 恭光	専任講師(教育学)
福島 茂明	専任講師(教育学)
甲斐 規雄	専任講師(教育学)
岡田 巧	教授(経済学)

研究紀要第五号発刊に際して

学長 児玉 九十

『明星大学研究紀要—理工学部—』第5号「研究紀要第五号発刊に際して」と全文同

=掲載 略=

《編集後記》

紀要第5号が発刊の運びとなった。前号に引続き、人文学部の各専門スタッフのかたがたによる貴重な研究論文を寄せていただき、誠にありがたい。大学の規模と内容が年をおって拡大され充実するのに伴って、研究面での成果がいよいよあがることは、ご同慶のいたりである。ご執筆のかたがたに厚くお礼を申し上げる。

さて、今年は1970年代を迎えて、われわれは新たな人類の希望と責任を痛感する。今日の高度技術社会の到来と情報化社会の出現とによって、無限の多様性と可能性とをもつ世界と宇宙の全体が直接われわれの感覚に触れるようになった。今やわれわれは、時代の挑戦に対する人類の平和と進歩への信念に燃えねばならない。

他方、変容しつつある世界のテンポに順応できないことから生じた現代社会の根深い混乱と人間疎外の現象、それらの改革と解決に対する熱望は、新しいタイプの Humanism の創造を求めている。われわれはそれぞれの世界に根をおろし、しかも全体的世界に心を開くものとして教育や学問研究について考えねばならない。特殊を通しての普遍の実現、共存と相互扶助による人類の平和の具現を、そして何よりも切実に、知的・倫理的 excellence を、現代社会が渴望していることを忘れてはならない。

今回寄稿されたかたがたの中で、(紙面の都合で限られた) 特にご執筆いただいた教授の紹介を簡単にいたしておきたい。

《石川 進教授》 東北大法文学部卒、旧制二高・浪速大・成蹊大の各教授を歴任、昭42年本学人文学部ドイツ語担当教授。

《岡田 巧教授》 京大経済学部卒、神戸高商・京都美大・姫路短大の各教授を歴任、昭39年本学経済学担当教授、昭41年経済学科主任教授、東洋経済史の権威。

最後に、この紀要の校正・印刷などの苦勞を担当して下さった甲斐規雄氏に、編集委員会に代わって心からの謝意を表したい。

追而……本号にご執筆いただいた経済学科主任の岡田巧先生が去る4月15日ご他界されました。全く突然のことで、本号掲載の論文が先生の絶筆となりました、謹んで哀悼の意を捧げます。

(M・K)

6. 第6号 1971 (昭和46) 年5月刊

目次

研究紀要第六号発刊に際して……………	児玉 九十
ゲーテの「ファウスト」について……………	田尾 一一 ……1
Despair “with” God	
—G.M. ホプキンスの “terrible sonnets” をめぐって—……………	龍野 武昌 ……9
草地改良における入会権の権利調整……………	伊藤 章 ……19
二個人間の相互関係の研究について……………	酒井 清 ……29

金融政策の基礎としての貨幣理論……………	石野 典 ……	39
公共財としての教育……………	大浦 一郎 ……	49
英文要旨……………		65

執筆者紹介

児玉 九十	学長
田尾 一一	教授 (ドイツ文学)
龍野 武昌	助教授 (アメリカ文学)
伊藤 章	教授 (社会学)
酒井 清	教授 (心理学)
石野 典	助教授 (経済学)
大浦 一郎	助教授 (経済学)

研究紀要第六号発刊に際して

学長 児玉九十

『明星大学研究紀要—理工学部—』第6号「研究紀要第六号発刊に際して」と全文同
=掲載 略=

《編集後記》

人文学部「研究紀要」第6号が刊行されることになった。毎回のことながら、学部の各研究室の先生方には、ご多用中にもかかわらずご寄稿いただき、紀要に精彩をそえて下さったことに対し厚くお礼を申し上げる。

さて、今春人文学部に大学院^(ママ)文学研究科社会学専攻が認可になったことを心からお慶びしたい。社会学科主任教授銅直勇先生初め同研究室の先生方のお骨折りは全く大変だったと思う。今後のご発展をお祈りしたい。

昨年暮にマサチューセッツ州立大学 W・R スミス博士を迎え、経営学の集中講義を催したことは別刷の講義要旨でご承知のことと思う。また4月3・4日には「日本動物心理学会」が6号館を中心として、5月8日には「世界法学会」が本館会議室を会場として行われ、それぞれ盛会裡に終了した。さらに10月には「日本教育社会学会」大会の開催が予定されている。全国的学会が本学で次々と開かれることは、学術研究の立場からご同慶にたえない。

なお前号に引き続き寄稿された方々の紹介を若干付記する。

田尾一一教授 東北大独文学科卒、県立高校長、東京芸術大教授、学部長を経て昭39年本学独逸語専任教授。ゲーテ、ペスタロッチー、デューイ等に関する研究あり。今春ヨーロッパ視察。

伊藤章教授 東大社会学科、農業経済学科卒。北京大学、農林省調査局及び農業技術研究所研究主任を経て昭42年社会学科専任教授。農林社会学の専門。

酒井清教授 広島文理大教育学科卒。鹿児島大教授、東京都立教育研究所所員を経て昭42年本学専任教授。教育心理学の専門。

竜野武昌助教授 青山大大学院修了。東海大、青山大講師を経て昭42年本学英語英文学科専任

石野典助教授 中央大大学院修了。札幌短大等を経て昭42年本学経済学科専任。金融貨幣論の専門。

大浦一郎助教授 青山大大学院修了。同研究所助手を経て昭42年本学経済学科専任。財政学の専門。

(M. K.)

7. 第7号 1972 (昭和47) 年2月刊

目次

研究紀要第7号発刊に際して……………	見玉九十
人身保護令の特権剥奪権に関する論争の批判および評価	
1860年代のアメリカ合衆国を中心として……………	岡田 皓一 ……1
言語理論の方法論的考察—意味の問題をめぐって……………	村松仙太郎 ……13
家族解体の理論と分析	
家族解体研究における C.Cooley および M.Richmond の貢献について……………	三好豊太郎 ……25
幼児チンパンジーにおけることばの理解と発声の学習	
一類人猿の知能的行動に関する心理学的研究 (1) —……………	岡野 恒也 ……37
学級集団における生徒の対人認知 pattern の研究 (1)……………	塚田 紘一 ……39
Isolation がラットの情動に及ぼす影響について……………	菅野 衷 ……71
開発途上諸国における初等教育レベルでの現職教育のための通信教育課程……………	甲斐 規雄 ……81
英文要旨……………	95

執筆者紹介

見玉 九十	学長
岡田 皓一	助教授 (政治学)
村松仙太郎	教授 (英文学)
三好豊太郎	教授 (社会学)
岡野 恒也	助教授 (心理学)
塚田 紘一	講師 (心理学)
菅野 衷	助手 (心理学)
甲斐 規雄	講師 (教育学)

研究紀要第七号発刊に際して

学長 見玉九十

『明星大学研究紀要—理工学部—』第7号「研究紀要第七号発刊に際して」と全文同
=掲載 略=

《編集後記》

早いもので、この紀要の創刊号が出た昭和41年から数えると今回第7号となる。高いレベルを保持しながら、ここまで順調に号数を重ねられたのも、ご多用にもかかわらず、ご寄稿下さる先生方のいつもながらのご協力の賜と編集子として厚くお礼を申し上げる。

さて、昨年10月22、23両日、日本教育社会学会第23回大会が本学において開催され、全国より多数の会員が参加、盛会裡に終了した。また昨年大学院人文学研究科社会学専攻が開設されたが、今年度は引続き同研究科に教育学専攻が増設され、新たに理工学研究科土木工学専攻が開設される運びとなった。本学にとっての重要な責務を遂行された

各関係の先生方のご努力に深く敬意を表する次第である。

ごく最近、本学の図書館は、1911年創刊～64年廃刊の、イギリス労働党を中心とする機関誌であった”Daily Herald 紙” Library のコレクション全部(約3万点)を入手した。現品は目下委託倉庫に保管され整理中であるが、社会科学関係の極めて貴重な国際的研究資料であって、本学の図書館に一段と精彩を添えるものとなるだろう。

今回も前回に引続き、ご寄稿下さった先生方の略歴を付記させていただく。

三好豊太郎教授 東大社会学科卒。明治学院社会事業科教授、労働科学研究所員、日大研究所教授を経て昭和42年社会学科専任教授。社会学社会福祉の専門。

村松仙太郎教授 法政大大学院修了。法政大助教授を経て、昭和43年英語英文学科専任教授。

岡田皓一助教授 日大大学院修了。昭和44年人文学部専任助教授。政治学の専門。

岡野恒也助教授 東京教育大研究科卒。東横学園短大教授を経て昭和43年心理教育学科専任助教授。動物心理学の専門。

塚田紘一専任講師 早大大学院修了。昭和45年人文学部心理教育学科専任講師。臨床心理学の専門。

甲斐規雄専任講師 早大大学院修了。昭和45年人文学部心理教育学科専任講師。

終わりに、今回の紀要の刊行の仕事全般に亘って担当して下さい下さった甲斐規雄、関知子両氏に対して編集委員会より心からの謝意を表する。

(M. K.)

8. 第8号 1972(昭和47)年12月刊

目次

研究紀要第8号発刊に際して……………	児玉 九十
現代詩とその象徴性……………	尾島庄太郎 ……1
回想と音の思想家	
—キェルケゴールのレギーネ宛の手紙から……………	太田 早苗 ……13
畜産の地域間協業に関する研究	
—育成牧場を中心として……………	伊藤 章 ……21
宗教混在地域における社会的緊張の生成と展開過程について……………	福永 安祥 ……33
学級集団における生徒の対人認知 pattern の研究……………	塚田 紘一 ……47
財政連邦主義と集権化の増大……………	大浦 一郎 ……59
藤原実資二条家考(1)……………	杉崎 重遠 ……90
英文要旨	

執筆者紹介

児玉 九十	学長
尾島庄太郎	教授(英語)
太田 早苗	助教授(英語)
伊藤 章	教授(社会学)
福永 安祥	教授(社会学)

塚田 紘一 講師 (心理学)
大浦 一郎 助教授 (経済学)
杉崎 重遠 教授 (国文学)

研究紀要第八号発刊に際して

学長 児玉九十

『明星大学研究紀要—理工学部—』第8号「研究紀要第八号発刊に際して」と全文同
=掲載 略=

《編集後記》

人文学部「研究紀要」第8号が刊行されることになったが、今回も7名の先生方の原稿をいただき、紀要の内容が一段と充実したものになった。いつものことながら、ご寄稿いただいた先生方に心からお礼を申し上げる。

今年4月より、昨年の社会学に引続き大学院研究科に教育学専攻修士課程を設置することが認可になったことを、皆様と共に喜び申し上げたい。飯田晁三教授、安倍三郎教授を柱とする陣容は全く素晴らしく、ご尽力いただいた多くの研究室の先生方のご苦勞に深く感謝を捧げたいと思う。

去る5月12日にはコロムビア大学 Teachers College の R.J. シェファー学部長を迎えて、大学教育の問題についての講演会、11月17日の O.F. ボルノー教授を迎えての講演会は、久しぶりに、实在哲学と教育学で有名な、老いて益々円熟された博士から、含蓄あるお話しを伺った。また通訳には本学の小島威彦教授が当られたが、先生の名訳を通して一層实在哲学の深味へと聴象を導かれたように思う。紹介の労をとられた小島先生に心からお礼を申し上げる。12月も追って11、12、の両日、今年もマサチューセッツ大学の経営学部長 W.R. スミス博士を迎えた。博士の集中講義も今年で第4回を数える。人なつこい人柄と、企業の実際に通じた博士の引例は、他の追隨を許さぬもので、流石に、国際的な視野の上になつて、実際に流れ易いマーケティングの問題を一つの理論にまでまとめられていくその論述には感心させられるものが多い。11月23日には日本税法学会第1回関東地区大会、11月25・26日には日本通信教育学会が本学で行われ、それぞれ盛会裡に修了したことはご同慶に堪えない。

最後になったが、前号同様ご寄稿された先生方のご紹介を付記しておく。

(M.K.)

尾島庄太郎教授 早大文学部文学専修卒業。オクスフォード大学留学。早大教授、日本イェイツ協会会長、日本アイルランド交友会会長、早大名譽教授。昭46年本学英語英文学科教授。アイルランド文学、イェイツ研究の権威。文博。

杉崎重遠教授 早大文学部国文学科卒業。大妻高等学校を経て、昭41年本学国文学専任教授。文博。

伊藤章教授 東大社会学科、農業経済学科卒。北京大学副教授、農林省統計調査局及び農業技術研究所研究室長を経て、昭42年社会学科専任教授。農村社会学、土地経済学の専門。^(ママ)

福永安祥教授 早大政経学部卒業。同文学部大学院を経て東京電機大学専任講師。同41年本学社会学科専任助教授、44年教授。教育社会学、社会調査担当。東南アジア研究の権威。

大浦一郎助教授 青山学院大経済学部卒業。同大学院経済学研究科博士課程修了。青山学院大経済研究所助手を経て、昭42年本学経済学科専任講師、46年同助教授。財政学担当。

太田早苗専任講師 京大文学部哲学科卒業。同大学院博士課程修了。昭44年本学英語専任講師。

塚田紘一専任講師 早大文学部哲学科教育学専修卒業。同大学院文学研究科教育学博士課程修了。昭45年心理教育学科専任講師。

9. 第9号 1973(昭和48)年5月刊

目次

研究紀要第9号発刊に際して…………… 児玉 九十

今日の哲学者の目録的展望

 —特に日独の思想交流をめぐって…………… 小島 威彦 ……1

リンカーン大統領の独裁力…………… 岡田 皓一 ……21

Les Nourritures Terrestres の意味講造…………… 増田 治子 ……37

英語教育・その背景

 —40年の回顧…………… 海江田 進 ……53

マックス・ウェーバーの歴史的主体性の問題

 lasciate ogni speranza…………… 山下淳志郎 ……63

Wolfgang Köhler の Psychophysik について…………… 和田 陽平 ……83

Category System による幼児の共同作業場面における言語行動に関する研究(一)…………… 塚田 紘一 ……95

教員の現職教育における通信教育の第二次世界大戦後吾国への導入課程

 —国立の教員養成大学・学部の免許法認定通信教育を中心に—…………… 甲斐 規雄 ……113

清朝末期における中国造船業の動向…………… 亀谷 隆行 ……125

藤原實資二條家考(2)…………… 杉崎 重遠 ……154

英文要旨……………157

執筆者紹介

児玉 九十	学長
杉崎 重遠	教授(国文学)
小島 威彦	教授(哲学)
岡田 皓一	助教授(政治学)
増田 治子	助教授(仏語)
海江田 進	教授(英語)
山下淳志郎	助教授(社会学)
和田 陽平	教授(心理学)
塚田 紘一	講師(心理学)
甲斐 規雄	講師(教育学)
亀谷 隆行	講師(経済学)

研究紀要第9号発刊に際して

学長 児玉九十

『明星大学研究紀要—理工学部—』第9号「研究紀要第9号発刊に際して」と全文同
=掲載 略=

《編集後記》

人文学部研究紀要第9号が刊行される。明年は本学創立10周年の記念の年を迎えるわけだが、年月のたつのは全く早い。本学の発展とともに歩み続けてきた紀要も年を増す毎に充実した内容のものに成長してきた。このことに対し心からの喜びを感じるのは教職員の方々みな同じだと思う。今号もご多用中を多くの先生方から優れた研究論文を寄せていただいた。全く感謝のほかない。

さて近年、われわれの生活環境を早急に検討し改善することが必要だという意見で賑わっている。衣食住の生活にかかわる物価・公害・土地など一連の生活環境改善の諸問題である。異常な高度成長経済のひずみだと言ひ、また国民不在の政策の結末だと評される。私もたしかに政策の貧困と矛盾の結果だと思う。政治・経済界の反省と善処を望んでやまない。

国民生活の立場から、こうした環境問題を如何に意識し、調整し改善して行くべきか。われわれは自然科学・社会科学の研究と技術の成果に加えて、総合的・国民的立場からわれわれの生活環境の改善について再検討し、急速にその解決に全力を集中すべき時に逢着していると思う。

また他面、こうした問題について考えるとき、問題の核心は本来われわれ自身に問われるものであることも忘れてはならない。あのかつてのスイスの生んだ偉大な教育者 J. H. Pestalozzi, その全生涯を人間救済の教育事業に捧げつくした彼の喝破した声に耳を傾けよう。環境の改善も社会の改革も、また人間の救済も帰するところは、人間そのものの内界の純化と確立を基礎とするから、人間性の尊重と覚醒と陶冶とを目指すことよりほかはない。「先ず内を清めよ、然らば外も清まるべし」キリストの崇高な真理は永遠に生きている！

終わりになったが、今号も寄稿された論文の編集と印刷所との交渉の労を、甲斐規雄氏が多忙な本務の中で執って下さった。同氏に対し心から謝意を表したい。それから前号と同じく、執筆いただいた先生方の簡単なお紹介を、読者のために次に掲げるが、非礼な点はお許しをいただきたい。

(M. K)

- 杉崎重遠教授—— 大15年早大文学部国文学科卒。文学博士。私立大妻高等学校教諭を経て、昭41年より本学教授・国文学担当。古代文学および和歌文学の研究業績が多い。
- 小島威彦教授—— 昭3年京大文学部哲学科卒。昭5年東大大学院修了。日大講師。文部省国民精神文化研究所所員等を経て、昭40年本学教授・哲学担当。マルセル・ボルノウ・コラル・ハイデッガー等に関する造詣深く著述も多い。また数年前の新聞上でのハイデッガーとの対話は有名である。現在国際哲学研究会常任理事。
- 岡田皓一助教授—— 昭34年日大法学部政経学科卒。昭40年同大学院政治学専攻博士課程修了。昭41年本学専任講師を経て助教授・政治学担当。
- 増田治子助教授—— 昭33年慶大文学部卒。同大学院仏文学専攻・都立大仏学博士課程を修了。昭42年本学専任講師を経て助教授・仏文学仏語学担当。
- 海江田進教授—— 昭6年現東京外来語大英文科卒。神奈川大学教授・東京外語大教授を経て昭47年本学教授・英語英文学担当。英文学史関係の著述、特にシェイクスピアに関する研究が多い。
- 山下淳志郎助教授—— 昭28年北大哲学科卒。昭37年同大学院西哲専攻博士課程修了。酪農学園短大講師を経て昭41年本学助教授・社会倫理学担当。
- 和田陽平教授—— 昭7年東大心理学科卒、昭11年同大学院修了。東大助手、京城大・関西大・京大教授・都立大教授を経て、昭46年本学教授・心理学担当。実験心理学に造詣深く著述も多い。特に感覚知覚研究に関する権威。
- 塚田紘一講師—— 昭39年早大文学部卒。昭45年同大学院教育学専攻博士課程修了。昭45年本学専任講師・児

童心理学担当。教育心理学に関する論文あり。

- 甲斐規雄講師—— 昭39年早大教育学部卒。昭41年同大学院教育学専攻修了。昭45年本学専任講師・教育学担当。本学通信教育部主任。
- 亀谷隆行講師—— 昭39年立命館大史学科卒。同大学院修士課程・明大大学院史学専攻修了。昭46年本学専任講師・東洋経済史担当。

10. 明星大学創立十周年記念号 1974 (昭和49) 年10月刊

目次

研究紀要第10号発刊し際して……………	児玉 九十
刑法改正における理論の相剋……………	猪股 英夫 ……1
Jacob Grimm と源宗尊重の精神……………	春田伊久蔵 ……15
ジョフリー・リュデールの〈遙かなる恋〉について……………	佐藤 輝夫 ……31
『紋切型辞典』と『マダム・ボウァリィ』……………	皆川 昭 ……47
リンカーン大統領の独裁力 (Ⅱ)……………	岡田 皓一 ……65
ロバート・リンダの随筆……………	梶木 隆一 ……85
Walter Pater and His Study (as a mode of perception)……………	龍野 武昌 ……95
近世における文明思想の形成……………	銅直 勇 ……105
全体性の後退 (社会存在と認識に関する序章)……………	山下淳志郎 ……119
Sentiment の性格に関する私見……………	安倍 三郎 ……131
性格学への道……………	戸川 行男 ……141
幼稚園・保育所の保育時間延長の動向についての考察……………	岡田 正章 ……149
ルネッサンスとイタリア大学……………	前之園幸一郎 ……159
多摩地域と将門伝説 (若干の社会思想史的考察)……………	中野 藤吾 ……179
源清延二条家考 (一)……………	杉崎 重遠 ……198
英文要旨……………	201
人文学部研究紀要総目次 (第1号～第9号)……………	210

執筆者紹介

児玉 九十	学長
猪股 英夫	教授 (法学)
春田伊久蔵	教授 (ドイツ文学)
杉崎 重遠	教授 (国文学)
佐藤 輝夫	教授 (フランス文学)
皆川 昭	助教授 (フランス文学)
岡田 皓一	助教授 (政治学)
梶木 隆一	教授 (英文学)
龍野 武昌	教授 (英文学)

銅直 勇 教授 (社会学)
山下淳志郎 助教授 (社会学)
安倍 三郎 教授 (心理学)
戸川 行男 教授 (心理学)
岡田 正章 教授 (教育学)
前之園幸一郎 助教授 (教育学)
中野 藤吾 教授 (経済学)

研究紀要第 10 号発刊に際して

学長 児玉 九十

『明星大学研究紀要—理工学部—』第 10 号「研究紀要第 10 号発刊に際して」と全文同

=掲載 略=

〈編集後記〉

顔氏家訓に「光陰可惜、譬諸逝水」とある。あれから 10 年、全く歳月のたつのは早いものだと思う。悲喜交々の思い出を胸に懐きながら、限りなき望みを託する未来を願う昨今である。過去を担い未来を孚むという「永遠の今」に立ち、教育と学問研究の府として本学創設の理想実現に邁進するほかはない。ともあれ、本学がここまで成長したことは全く多くの先生方、職員の方々の力と苦勞によるもので、改めて皆様のご功績を称えと共に今後の活躍を祈りたい。

去る 3 月には、学苑 50 周年と大学 10 周年を記念としてのヨーロッパ研修旅行団、百瀬甫教授を団長として木田教授・川野助教授・学生諸君 40 名余が訪欧、英国の宿泊研修その他各地で望外の成果を得て無事帰国された。また今年度より大学院人文学研究科に修士課程心理学専攻、博士課程教育学専攻が許可されたことと併せて、ご同慶に堪えない。ただ残念なことに 49 年 2 月 6 日経済学科井藤半彌教授、5 月 7 日心理教育学科主任安倍三郎教授が逝去された。真実に惜しい。ここに両先生のご冥福を祈り、謹んで哀悼の意を捧げる。

さて本学創立 10 周年記念の研究紀要を刊行するに当り、多数の先生方より玉稿を寄せていただいた。記念号にふさわしい内容の充実した立派なものとなり、心からのお礼を申し上げたい。なおこの紀要の編集・印刷に勞をとられた編集委員の方々、直接その涉に当られた甲斐助教授に謝意を表したい。終りに失礼を許していただき、執筆下さった先生方の紹介を付記する。

(M・K)

猪股英夫教授——法学。東大卒、旧制姫路高・流通大教授を経て、昭 41 就任。

春田伊久蔵教授——ドイツ文学。東北大卒、中大・成城大教授を経て、昭 41 就任。

佐藤輝夫教授——仏文学。早大卒、文博、同大を経て昭和 44 就任。去る 3 月学士院賞を受賞。

皆川昭助教授——仏文学。早大卒、拓大を経て昭 41 就任。

梶木隆一教授——英文学。東大卒、東京外語大を経て昭 48 就任。

竜野武昌教授——英文学。早大卒、東海大・青山学院大を経て昭 42 就任。

銅直勇教授——社会学。京大卒、成城大・横浜国大・日大を経て昭 39 就任。本学人文学部長。

山下淳志郎教授——社会哲学。北大卒、酪農学園大を経て、昭 41 就任。

安倍三郎教授——心理学。東北大卒、文博、建国大・昭和女子大を経て昭 40 就任。本掲載論文が絶筆となる。

戸川行男教授——心理学。早大卒、文博、同大学教授を経て、昭 48 就任。

岡田正章教授——教育学。広島大卒、都立大・厚生省を経て、昭 42 就任。

前之園幸一郎助教授——教育学。早大卒、東大を経て昭 41 就任。

中野藤吾教授——経済学。東京商科大卒、都立立川短大学長を経て昭 46 就任。

岡田皓一助教授——政治学。日大卒、昭 41 就任。

杉崎重遠教授——国文学。早大卒、文博、大妻学園等を経て、昭 41 就任。

【注】

- 1 本文頁の論文題目は「社会事実の数量化的アプローチについて」と記載されており、論文内容から目次記載の論文題目「社会事業の数量科的アプローチ」よりも、本文頁記載の論文題目が正しいと考えられる。

【付記】

初期の「目次」には本文頁の論文題目と対照してみると副題が省略されているものがあるが、ここでは全て原文を尊重し、省略された目次頁記載の通りとした。ご了解いただきたい。

【解題】

明星大学開設初期における『研究紀要』（2）
— 人文学部 —

高 島 秀 樹[※]

目次

はじめに

1. 大学における研究活動と『研究紀要』
2. 掲載論文と著者
3. 発刊の辞と編集後記
 - (1) 発刊の辞
 - (2) 編集後記

おわりに

はじめに

本誌前号『明星—明星大学明星教育センター研究紀要』第5号（2015年3月刊）に【資料：明星大学の歴史】「明星大学開設初期における『研究紀要』（1）—理工学部—」と、その【解題】を掲載した。本号ではその続編として人文学部の研究紀要について【資料】として掲載するとともに、その【解題】を掲載する。【資料】として掲載する内容は、人文学部の研究紀要の第1号から第10号の各号の①目次、②執筆者紹介、③発刊の辞（児玉九十学長執筆）、④編集後記（「M・K」との署名あり）であり、前号と同じであるが、その内で理工学部の研究紀要と全く同文のものについては明記したうえで掲載を省略した。

1. 大学における研究活動と『研究紀要』

前号【解題】にも記したように、明星大学は1964（昭和39）年4月に理工学部1学部5学科（物理学科、化学科、機械工学科、電気工学科、土木工学科）で発足し、翌1965（昭和40）年4月に人文学部3学科（英語英文学科、社会学科、心理・教育学科）を増設、さらに1966（昭和41）年4月に人文学部に経済学科を増設、その後通信教育部の開設と大学院の開設を別とすれば、通学課程の学部としてはこの2学部9学科体制が1992（平成4）年に青梅校に情報学部・日本文化学部が開設されるまで、1991（平成3）年度まで続いた。このような状況を見れば、理工学部と人文学部の紀要を見ることによって、明星大学の開設初期の研究活動の一端を知ることができる。

大学における研究活動と研究紀要の位置づけ、明星大学における研究紀要発刊の事情については前稿に記したとおりであり、ここでは記載を省略するが、人文学部の研究紀要の刊行記録のみを以下に記す。

[※] 人文学部人間社会学科教授 教育社会学

第1号	1965 (昭和40)年3月31日刊
第2号	1966 (昭和41)年3月31日刊
第3号	1967 (昭和42)年3月31日刊
第4号	1968 (昭和43)年12月31日刊
第5号	1970 (昭和45)年4月30日刊
第6号	1971 (昭和46)年5月31日刊
第7号	1972 (昭和47)年2月29日刊
第8号	1972 (昭和47)年12月31日刊
第9号	1973 (昭和48)年5月23日刊
第10号	1974 (昭和49)年10月26日刊

刊行時期については、第6号(理工学部=1971(昭和46)年9月30日、人文学部=1971(昭和46)年5月31日)、第8号(理工学部=1973(昭和48)年3月23日、人文学部=1972(昭和47)年12月31日)において若干の相異があるが、基本的にはほぼ同時期に刊行されている。人文学部においても1年度1回の刊行が継続されており、この点は評価することができる。と解題執筆者は考える。

2. 掲載論文と著者

各号に発刊の辞を掲載している兎玉九十を除き、第1号から第10号の論文執筆者の所属別人数は次の表1.のとおりである。

表1. 所属別執筆者数

	一般教育	英語英文学科	社会学科	心理・教育学科		経済学科
				心理学	教育学	
第1号	5	3	1	0	1	—
第2号	4	2	1	1	0	1
第3号	2	1	1	1	3	0
第4号	5	1	1	1	1	1
第5号	2	1	1	1	3	1
第6号	1	1	1	1	0	2
第7号	1	1	1	3	1	0
第8号	1	2	2	1	0	1
第9号	4	1	1	2	1	1
第10号	6	2	2	2	2	1

* 理工学部の研究紀要と異なり、人文学部の研究紀要では第1号から第10号の間では共著論文は掲載されていない。

* 一般教育英語所属と英語英文学科所属の間では、その所属が不分明であり、この表では(イギリス文学)(英米文学)(英語)等と記載されている者は英語英文学科に含めた。なお、『明星大学十年史』(1974年、明星大学刊)では一般教育(英語)と英語英文学科所属が明記されているが、その時点ではすでに明星大学に所属していない研究紀要論文掲載教員もあり、これによって全員の所属を明らかにすることはできなかった。

理工学部の研究紀要についての解題における指摘と同様に、各学科等に所属する教員数が異なり、2年度目に増設された学科があること、学科等に所属する教員数が変化することなどから、この数字を単純に比較することはできないが、若干の偏りはあるものの各部局に所属する教員が遍く研究成果を掲載している傾向があるといえる。なお、理工学部の研究紀要に比して一般教育所属教員の論文掲載が多い傾向があるが、これは両学部で一般教育所属の教員数が異なることから単純に人文学部の研究紀要に一般教育所属教員の論文の掲載が多いということとはできない。

具体的な論文執筆者を見ると、理工学部研究紀要と同様に、第1に、ベテラン教員が積極的に論文を掲載している傾向が見て取れる。例をあげるならば初期の人文学部長を務めた銅直勇、学科主任を務めた百瀬甫、安倍三郎、岡田巧などの論文が掲載されている。特筆すべきは第1代総務部長を務めた一般教育教授落合盛吉であり、英文学と生物学を合わせて専攻し、両分野の教育を担当し、理工学部の研究紀要（第4号）と人文学部の研究紀要（第1号・第2号）の両者に各専門分野の研究論文を掲載している。第2に、理工学部の研究紀要以上に刊行初期から助教授、講師、助手などの若手研究者が積極的に論文を掲載している傾向が見て取れる。

3. 発刊の辞と編集後記

(1) 発刊の辞

人文学部の研究紀要にも学長児玉九十による「発刊の辞」が全号に掲載されていることは理工学部の研究紀要と同じであり、両学部に通ずる明星大学研究紀要の特徴の一つと考えられることは前号【解題】で指摘したとおりである。その内容については第1号から第10号の全文を比較対照したが、全く同一であった。これは前号【資料】に掲載した内容から理解されるように、大学全体にかかわる近況報告が主体であることによる、あるいは大学全体に通ずるように意図して執筆されたことによると解題執筆者は考える。

(2) 編集後記

副学長（当時、後に第2代学長に就任）児玉三夫によると推定したM.K.の署名のある「編集後記」の内容について第1号から第10号の全文を比較対照したが、第1号から第4号までは全く同一であった。

第5号以降は理工学部の研究紀要と人文学部の研究紀要では内容が異なっている。

内容の相異点、相異が生ずるようになった理由の第1としては、理工学部の研究紀要、人文学部の研究紀要の編集後記の中に執筆者の紹介が記載されるようになったことがあげられるが、これによって相異が生ずることは当然である。第5号では、文章の内容はほとんど相異せず、執筆者の紹介のみが異なっている¹⁾。しかし、そのみにとどまらず相異点の第2としては、学会の開催や大学院研究科・専攻の開設など当該の学部に関連する事項が取りあげられていることがあげられる。その例としては、人文学部の研究紀要第6号に「日本教育社会学会」の開催予告、第7号に開催報告が記されているが、理工学部の研究紀要第6号・第7号には記されておらず、逆に理工学部の研究紀要第6号には「日本機械工学会」について、第7号には「日本保健物理協議会」について、人文学部の研究紀要の「編集後記」には記されていない内容が記されていることがあげられる²⁾。さらにそれに加えて相異点の第3としては、海外から招聘した研究者の講演や集中講義について人文学部に関連する内容について人文学部の研究紀要でその内容が紹介され、それに対する執筆者の感想が記されていることがあげられる。その例としては、第8号の「編集後記」に含まれるO.F. ボルノー教授の講演、W.R. スミス教授の集中講義に関する記述があげられる³⁾。相異点の第4としては、人文学部、理工学部の教育研究内容に関連するテーマについて記されていることがあげられる。その例としては、理工学部の研究紀要第7号の「編集後記」には「いよいよ1972年Big Scienceの時代を迎えた。この時にあって、私大が国に対して教育、研究の両面で果たす貢献度は最早だれも無視することはできなくなった。その意味で私学助成、

殊に理工系私大への助成は、国の当然の支出として考えるべき時機に到来していると思う。」との人文学部の研究紀要には見られない記述があり、人文学部の研究紀要第9号の「編集後記」には「さて近年、我々の生活環境を早急に検討し改善することが必要だという意見で賑わっている。」という状況に対して「政策の貧困と矛盾の結果だと思う」と指摘したうえで、「また他面、こうした問題について考えるとき、問題の核心は本来われわれ自身に問われるものである」といった考えが記されている⁴⁾。

多くの時事評論的文章や随想を残し、その多くが著書としてまとめて刊行されている明星大学創立者・第1代学長児玉九十⁵⁾に対して、第2代学長児玉三夫は研究論文や式辞などのほかに文章を残すことが少なかった⁶⁾。前号の【解題】において推測したとおりM.K.が児玉三夫であれば、この「編集後記」はその個人的意見を含む「肉声」を伝えるものとしての資料的価値があると解題執筆者は考えている。

おわりに

本誌前号に掲載した「明星大学開設初期に於ける『研究紀要』(1)―理工学部―」に続いて本号では『明星大学研究紀要―人文学部―』第1号から第10号の①目次、②執筆者紹介、③発刊の辞(児玉九十学長執筆)、④編集後記(「M・K」との署名あり)について全文同一のものを除いて【資料】として紹介するとともに、解題としての若干の考察を行った。前号掲載の内容と今号掲載の内容を合わせてお読みいただければ、明星大学創設初期における研究活動とその成果の一端について理解していただけるものと考えている。

なお、【資料】については「発刊の辞」「編集後記」のうち全文同一のもの掲載を省略したこと、【解題】については前号と重複する内容を含むとともに前号に記したことから省略した点があることから、前号と本号を合わせてお読みいただくようお願いする。

【注】

- 1) 『明星大学研究紀要―理工学部―』第5号、1970(昭和45)年4月刊、頁表示なし／『明星大学研究紀要―人文学部―』第5号、1970(昭和45)年4月刊、頁表示なし
- 2) 『明星大学研究紀要―人文学部―』第6号、1971(昭和46)年5月刊、頁表示なし・同 第7号、1972(昭和47)年2月刊、頁表示なし／『明星大学研究紀要―理工学部―』第6号、1971(昭和46)年9月刊、頁表示なし・同 第7号、1972(昭和47)年2月刊、頁表示なし
なお、児玉三夫は日本教育社会学会会員であった。
- 3) 『明星大学研究紀要―人文学部―』第8号、1972(昭和47)年12月刊、頁表示なし
- 4) 『明星大学研究紀要―理工学部―』第7号、1972(昭和47)年2月刊、頁表示なし／『明星大学研究紀要―人文学部―』第9号、1973(昭和48)年5月刊、頁表示なし
- 5) 児玉九十には『児玉九十自伝』のほか、『この道五十年:喜寿記念』1965年刊、『明星ものがたり』1976年刊(改訂版1998年刊)、『真実の教育を求めて』1977年刊など、時々発表した文章を収録した著書がある。
これらの著作については、廣嶋龍太郎「児玉九十著作目録の再検討(1)(2)」(『明星―明星大学明星教育センター研究紀要』第4号・第5号、2014年、2015年刊所収)を参照されたい。
- 6) 児玉三夫には『児玉三夫対談集～教育の源流を求めて～』1987年刊、『教育の真理と探究』(児玉三夫先生喜寿記念論文集)1996年刊に掲載されている「回想 教育と私」(同書、13～41頁)などが残されているが、児玉九十に比して少ないといわざるを得ない。

【付記】

本稿は歴史的研究であると考えて、全ての敬称を略させていただいた。ご了解いただきたい。